

■ 活動記録 ■

◆ 教育事業 ◆

オーストラリアセミナー

◆2016年度 オーストラリアセミナー報告

辛島 理人（神戸大学国際人間科学部准教授／前先端社会研究所専任研究員）

今年度も社会学研究科「先端社会講義E」と連動させるかたちでオーストラリア研修を行った。昨年度と同様に、研究集会を ANU と関西学院大学、日豪双方の有志により実施することとし、日本側の夏休みにあたる 2016 年 8 月 30-31 日に開催した。関西学院大学（社会学研究科）からは、大学院生 2 名が参加し、研究集会では松野靖子（修士課程 1 年）が「日本の保守主義」について、松村淳（大学院研究員）が「地域アート」について報告を英語で行った。

会場提供などをする受入校として ANU 側からも大学院生が司会や討論を担当してくれた。各パネルに参加した ANU の教員や院生から報告に対して意見や質問が出され、活発な議論が交わされた。昨年同様、キャンベラ市内にあるオーストラリア国立図書館の協力により、同館アジアコレクションをはじめとする資料・施設の見学を行うことができた。また、今回はキャンベラ市内の中央に位置する国会議事堂の見学を行ったが、偶然にも議会本会議の初日にあたり、総督らのパレードなど式典を間近に見ることとなった。これまでオーストラリア研修の開催に協力を惜しまなかったオーストラリア国立大学およびオーストラリア国立図書館の皆様にご礼申し上げたい。

◆オーストラリア研修を終えて

松野 靖子（社会学研究科博士課程前期課程）

滞在先であったオーストラリアの首都キャンベラは、海岸から離れた山の中に首都機能の設置を試み計画的に作られた街であり、最初自分にとっては些か“人間”を感じられなく、どこか寂しいという印象を受けた。

確かに、圧倒的な自然の豊かさとその中に身を置く時に感じた静けさにはすぐさま魅了された。大学の寮へチェックインをして昼食を取ったあと、私達は少しの間、大学周辺の自然を散策してみることとした。

樹木類や動植物の種類にはいずれも果てを感じさせない豊富さがあつた。国花である鮮やかな金色の花と緑色の葉が特徴的なワトル、かの有名なユーカリの木々、独特な色や声をもつ鳥、すぐ近くに感じるまた何か別の動物の気配、広大な湖、いずれもその中にいるだけで、時の進みがゆっくりとなったように感じた。普段日本の少々喧騒さがある中核都市で過ごしている自分にとっては、その時間の流れに感じ入った。

しかし夜に食事の為に街に連れて行ってもらった際、まだ 19 時にもなっていなかったと思うが、多くの店が既に閉まっており、道にも人が少ないのに気が付いた。案内してもらった料理店にもあ

まり人が入っておらず（人気の中華料理屋ではあったが）、首都とは思えない人の気配の無さに、少々の不気味さを感じた。自分のよく知っている夜の街の賑わいの要素がなかった。何もない自然に急に造った計画都市ということで、人口も少なければ歴史も浅いといったことが背景にあるからだろうか。いわゆるオーストラリア料理というものもなく、料理は異国のエスニック料理店に頼っている印象もあり、何だかちぐはぐといった感覚をもった。つまり、伝統というものが無いのだと思った。人々が長く生き継いで作り出したようなそういったものが感じられないと思った。そう思ってしまった当時の自分にとって、自分の研究分野が意図せず内にいかに自身への影響を与えてしまうものであるのか、後に気付かされる。

ここで自分自身の研究内容について、簡単に紹介をさせて頂きたい。自分がまず気になったのは昨今日本国内において、近隣諸国間の関係悪化に伴い排外的な言動や行動が見られるようになった状況である。更にここから、これらの説明として元々「保守的」な考えだった人々が以上のような事をするようになってきているのだと学術の世界でも言われる事を取り上げる。冷戦が終結し進歩主義的価値観も衰退した現在において、今やその存在が怪しい「保守的」な考え方を現在の現象の説明へともちだすことは、後の混乱を予想するという意味で危険ではないだろうか。この様な視点でもう一度本来の保守とは何を主張するものであったか、もしかすると排外的な考えはもっていなかったのではないだろうかという思慮の基に研究を進めている。

さて、この保守思想が語るものを分析するうちに、一つある主張をしていたことに気が付く。それは、合理的であればいいと推し進める近代主義的な価値観に抗し、伝統の中におき忘れた長年培ってきた人間らしさといったものへの信頼の復帰への促しである。伝統の中には、人が様々な困難にぶつかり、その都度試行錯誤して工夫を重ねた生き方といったものが存在している為、そう簡単に無視して新たな計画で塗り替えてしまうことはどうであるのかといったものだった。

そうした文章ばかりを読んでおり、何を言わんとしていたかにも注目すべきであったはずが、いつの間にか当時の自分は少しそれらの言説にのめり込みかけ過ぎていたと今になって考えられる。元々自分はこの様な考えからは遠く、むしろ既存の価値観などというものに縛られる事を好まないタイプであった様に思う。しかし未だ研究者としては頗る未熟であり、研究対象と自分との距離を見誤り、知らず内に対象に自分が説得されるという事態に陥っていた。この事に気が付くことが出来た契機の一つが今回の旅でもあった。

そのような保守思想のもつ考えに浸っていた時に見えたキャンベラの街はやはり「合理的」に計画されて作られた人工都市であり、何か人としての深さに欠けるという印象であった。

しかしこのイメージは後になるほど覆っていく。まずその日寮に戻ると、好奇心から寮付属の共同キッチン覗いてみた。その寮には外国人留学生が多く滞在しており、その学生らが自由に利用できる共同施設といったものが用意されている。そのキッチンにはコンロが複数、調理場スペースも豊富といった環境で、学生がそれぞれに思い思いの料理をしていて、わいわいと楽しげであった。眺めていると、学生が一人話しかけてきた。外食は減多にせず皆大抵は食材を買って来てここで調理するのだという。また、その学生はキャンベラでの生活についても色々と語ってくれ、そこでの生活をとても気に入っている様子だった。

また次の日の午前中が発表であったが、朝早くにもう一度発音を確認したく原稿を朗読していた

時、窓の外を見ると、ジョギングしていく人、サイクリングをする人がある。年配の人もいた。後から、お世話になった日本人研究者の夫人の方に伺ったところ、オーストラリアでは早く寝て、朝早くに体を動かすような事をする人が多いのだという。

またその方に聞いた話によると、オーストラリアの夜の街が静かな理由として、人々は仕事を17時くらいに終わると早々と家に帰り、家族と過ごす時間を大切にするのだという。

反対にこう思うと日本は、夜遅くまで家に帰らず明るい街中で仕事仲間や友人と過ごし、店やコンビニは遅くまで開いているが、そこで働く人々への過酷さを代償としているからこそ出来るものであるといった見方など、便利さの裏の面が気になってしまう。もちろん、それも悪とは言えず、どちらにも善し悪しがあるし、またそのように過ごしている人の数もあくまで相対数に過ぎないのだが、いずれにせよ1つの文化を知ることによって様々な事が見えてくる体験は面白いことの様に感じられた。

要するに、伝統などなくても、都市としての魅力がなくても、置かれた環境でどう過ごしていくかが重要なのである。また、歴史は浅く伝統などは（先住民族の伝統には博物館で圧倒されたが）あまり感じられない街であると当初思ったが、寧ろ自分が無いと感じたそれらは逆に必要とされておらず、しっかりとしたそれぞれの生き方への考え方が人々にあり、それに従った生活を送っている人が多いという様に感じられた。人々がそれぞれ前向きに真剣に生活している姿を見ることが出来た事により、当初抱いたキャンベラという街に対するイメージはこうして変わっていった。また、それがこの街にとってのある種の伝統であるのだと感じた。

さて、研究発表の内容を振り返ると、まずは戦後の日本における保守思想家の代表人物の一人である福田恆存の主張と、社会学で言われている保守主義の定義（具体的には、知識社会学者カール・マンハイムが類型化した保守主義）が、まず同質である部分が見られることを指摘した。それは、保守主義と伝統主義とは異なるということ、進歩主義に対する反動が保守主義であるということ、また先程から述べている様に合理性を求める傾向に対しそれらが軽視した非合理性にこそ人間性があるという事、急進主義に対する漸進主義である事などである。それらにより、戦後の日本には保守思想と社会的にも定義しうる考えが存在したことを示した。そして後半、日本の現在「保守的」と言われている現象をいくつか取り上げ、それらが知識社会的な類型概念からは外れていると示した。それら現在の現象とは、排外主義的な行動や言動、愛国心、革新的な事を主張する保守政党の出現等である。そうすることで、戦後の保守思想と今現在「保守的」と呼ばれているものとが異なるものである事を示し、現在のものはまた新しい現象的なものであるのではないかと可能性を示した。これらを、図等を入れたスライドを用いながら発表した。

拙い英語でのスピーチだったが、国籍問わず予想以上に多く集まって下さった方々に聴いて頂いた。そこでもらった質問は、具体的には、当初の関心である現在の排外主義的現象は、では、何を原因としていると考えるかという所を改めて問われたものであったり、保守思想と排外主義には果たして本当に繋がりはないのかといった事や、また排外主義に当初関心があったはずが保守思想研究を中心にしている事を指摘して、関心が排外的現象から思想研究へ移っていないかなどを問われた。

日本の中のみで研究を進めていたとすれば、こうした研究を紹介すると戦後保守思想を詳しく見

ているという事で、ある種の歴史研究として評価される事もある。しかしこの様に、海外では保守思想の研究をしている事が今の現実に起こっている現象とどう繋がっているのかに疑問を投げかけられるなど、より関心が普遍性を帯びている事に気が付いた。そうした質問などを通じて、世界で求められる研究とは、特定の国の中でのみだけでなく、広く共通の理解が得られるものであるということだと学んだ。

今回の発表をすることで、改めて自分の当初の研究の意義や関心から離れていかないように注意し、より世界的な一般性へ近づけていける研究になるように努めていきたいと思うに至った。これらを踏まえ、今後は、保守思想の中で排外主義へも転じそうな考え方はなかったか、またどのような所が明らかに違うのかなどを、それら思想のもつ国家、異文化へ対する考えや、また理想とする状態を詳しく見ていく事を通して明らかにしていきたい。

初めての学会発表、それも英語での発表という事で、その準備から初めての経験だった。まず日本語で要約を作成し、それを英文に直し、それを基にパワーポイントにする。更に読み上げ原稿を時間配分に注意し作成する。指導の辛島先生に見て頂き、その都度修正を施した。そうして完成した読み上げ原稿の単語の正しい発音を調べていき、練習をする。そうした準備は積んでいたが、いざ本番前は緊張をした。また、発表後の質疑応答への対応が不十分であったとも感じられ、反省した。これらに気が付くことが出来て、今回の体験は今後の自分にとってとても貴重なものとなった。

今回の旅において、発表準備に丁寧な指導をして下さり、また引率や現地でもあらゆる面でお世話になった辛島先生にまずお礼を申し上げたい。車で資料館や博物館、政府機関や各国の大使館地区や商業施設、カンガルーが出現する可能性のある地点を粘り強く回って下さったりと、今回の旅を大変充実したものにして下さった。また、現地でお世話になった喜多川御夫妻、Yasuko Hassall Kobayashi 先生にも、現地での案内や援助、また今後についてのアドバイスなども多く頂いた。多くの方々のご協力により、自分にとって非常に意義の有る時間を過ごさせて頂けた事に感謝したいと思う。